

発刊のことば



大八洲開拓農業協同組合

代表理事組合長 石田 時雄

そもそも私どもの開拓は、大陸開拓の先駆者として昭和七年に渡満した弥栄開拓の佐藤孝治団員が氏独自の理想とする村造りをめざし、昭和十四年に隣接の柳毛河地区に入植、団長として建設した大八洲開拓団が発祥である。

終戦のため避難流浪中大半の犠牲者を出し、生き残った団員婦女子を統率し帰国した昭和二十一年に当地に再起を期して入植、大八洲開拓農業協同組合を結成、爾来佐藤初代組合長の理念「組織の活用と協同化」を信条にこの道を歩むこと五十年にわたった。

堤防が未完成の菅生沼開拓地は作っては流される水害の繰り返しであった。昭和三十年にようやく完成した後も利根川溢流堤の決壊をはじめ、開拓の前途が危ぶまれた溢流災害も再三あった。昭和二十四年から山林跡地を開拓した台地の畑も強酸性の常習旱魃地帯であったので、畑地灌漑施設をはじめ作物が生育するまで土壌改良に十年余の根気を要した。

これらの幾多の困難や悪条件のともなわれない開拓は只の一つもないけれども、生活営農に大きい障害となっている溢流水による不時の災害に不安と恐怖を常に抱えている私どもは、今時では全国にも例のない宿命を背負っている苦難な開拓と言えるのではなからうか。

入植と同時に私どもは既存集落の中で生活し開拓営農を進めてきたので、地元の方達との協和を図り信頼関係を保ち、地域共存に僅かでも協力することに常に心掛けてきた。

しかしながら、私どもは自分の生業に追われ、只の厄介者に過ぎなかったにもかかわらず村の皆様には多大なご支援と温かいご厚情に支えられ、顧みれば私どもの想像も及ばなかった今日の成果とともに大八洲開拓再建の希望を実現できたことは私どもには過ぎたる喜びであり感慨もまた一入である。

ところで、わが開拓の苦難な生い立ちから三十年近い建設途上の沿革については佐藤組合長が自ら執筆編纂した大八洲開拓

史を昭和五十年に発刊している。

それで、大八洲開拓の草分けとして建設発展に多大な功績を残した佐藤初代組合長の亡き後、信頼し親愛してきた故人を偲び、追憶、逸話など組合員の回想文を収録した佐藤孝治回顧誌なりを残しておきたいと私は内心考えていた。ところが、このたび入植五十周年を迎えるに当たり五十周年記念誌の刊行を組合員の意向により決定したため、私はまったく念頭になかった本誌の編集に自信も確信も持てないまま申し入れを引き受けたことは、今にして思えば軽率であったと振り返っている。ついでには、本書の構成は、既刊史の簡単な一部の再録、記事や写真の補足をはじめ、前書以降の歩んできた組合事業及び行事を照準に記録し、組合員の原稿と家族写真を載せるとともに、前述の意を踏まえて佐藤組合長に係る記事と遺影をできるだけ多く採り入れ、それに林先生と石原女史の文章も拝借して収録した。表題には前誌の題字（当時山形県安孫子知事の揮毫）をそのまま採用して大八洲開拓史（続編）とした。

いづれにしても文筆には知識も才能も全くない未熟者がむやみに集めた資料をたよりに只事実を列挙したにすぎない。貧弱な内容はもとより杜撰な構想と粗雑な文章をなんとか纏めることができたことは、本書の作成総てをお願いした全国酪農協会の齋藤東彦氏のお陰によるもので誠に感謝に堪えない。

それに増して茨城県知事、守谷町長、水海道市長、全開連会長の各位に恐縮ながらお願いして序文を賜りましたことは、小誌にとつて甚だ光栄に存じますとともに厚くお礼申し上げます。

「開拓は三代にして成る」と申される開拓の真価が問われる組合員の世代交代を転機に、一、二世代の付託にこたえる担い手として開拓の使命達成のため活躍されんことを次世代に期待を寄せるとともに、大八洲開拓の最終の仕上げに向かって邁進されることを願って小誌の唯一の志とする。

先輩や同志が宮々として築いてきた実績と足跡を私どもは改めて偲び認識を深めるとともに、開拓の夢空しく大陸に散った仲間をはじめ志半ばに先立たれた大八洲開拓の幾多の御霊に本誌を供し、追悼の意を表して慰霊とする。

終りに、半世紀余の長年にわたり私ども開拓をこままで支え培っていただいた大勢の方々のご厚情ご支援に衷心より敬意と感謝の念を捧げまして粗辞ながら発刊の挨拶といたします。

平成九年二月